

日本赤十字社九州ブロック 第42次救護班（撤収班）

6月28日～7月4日 医師・山家 純一さん

日赤九州ブロックとして石巻への最後の派遣救護班として、熊本から山家純一医師ら7人が6月28日から7月4日まで被災地に入った。山家医師は4月1日からの熊本独自の第13班で救護活動に入って以来2回目だった。

九州ブロック第42班は石巻合同救護チーム第7エリアの旧北上川東地区にある湊小学校救護所での定点診療にあたった。朝から夕方までの診療で、毎日12～15人の患者を診察、急性期はなく、ほとんどが慢性期の薬



山家純一医師

切れの対応で、治療の必要な患者はほとんどいなかった。石巻合同医療圏では地域の医療機関が9割方復旧しており、合同救護チームからの情報をもとに、受診者に近隣の医療機関を紹介した。

ただ近隣の施設までは徒歩ではなく自転車で行く程度の距離があった。公共交通機関のバスも運行していたが、被災者はまだ500円の運賃よりその500円でおにぎりを買うほうを選ぶ状況だったため、イオングループに無料の巡回バスを出してもらっていた。医療費は被災者は無料だったが、証明書の提示が求められた。証明書は市役所が発行し、被災者に自己負担免除の申請をしてもらう必要があった。その申請に市役所へ行くのにも、無料の巡回バスが役立っていた。

ライフラインは合同医療圏の中で復旧しているところと復旧が進んでいない地域があり、旧北上川地区は復旧遅延地帯となっていて、電気、ガス、水道は復旧していたが下水道はまだで、市役所で下水を汲み取りしなければならない状況。満潮時には下水が道路にあふれる状態が続いており、完全復旧には年余が必要と思われた。道路は、幹線は問題なく、車の通行量も多くて朝夕は渋滞が起きるくらいだったが、旧北上川地区では道路の信号が停止していて、混雑の原因にもなっていた。

生活圏としては、医療はOKで、外見はほぼ復旧しているように見えて、まだまだ脆弱で、日中は経験しなかったものの、電気は小さな余震で頻繁に停電していた。仮設住宅の建設は進んでいたが、必要数が確保できるかが論じられていた。また仮設住宅の建設地がそもそも交通手段の確保がしづらいところだったので、当時、せっかく当選しても仮設への入居をキャンセルするケースが出てきて問題となっていた。

湊小学校は避難所となっており、診療活動をしていたその救護所はその小学校内にあった。受診者

は避難所だけでなく近隣の仮設住宅や被災した自宅の2階に住むいわゆる“2階族”の被災者も多かった。急性期はこの“2階族”も問題で、被災者への情報の提供と被災状況の把握はなかなか難しかった。

救護班は熊本単独派遣とは違い、最初の2泊は公民館に雑魚寝、食料は現地調達・自炊、入浴も近くの銭湯（温泉セン



湊小学校の診療所

ターのような入浴施設) を利用した。3日目からは旅館宿泊に変わり、食住の心配がなくなった。

日赤九州ブロックとして出した救護班は第42班が最後で、あとは近畿・関西地区の大学病院に引き継いだ。4月に救護活動を行った東松島市はほぼ復旧し、震災から4カ月たってある程度落ち着いてきていた。しかし今回は復旧遅延地帯に入った。下水道の復旧遅れや信号のつかない道路、満潮時の冠水などの問題が残っており、特に行政そのものが津波に流された地区では復旧には年余の期間が必要と思った。